

環境農政常任委員会委員会調査報告書

令和6年8月2日（金）に、綾瀬市役所外2か所において、次の調査事件について調査したところ、その概要は別紙のとおりでした。

調査事件

- 1 公害の防止その他環境の保全に関する事項について
- 2 農業、林業及び水産業に関する事項について

神奈川県議会議長 柳 下 剛 様

環境農政常任委員会委員長 田 中 信 次

1 調査の概要

- (1) 調査箇所 綾瀬市役所、環境科学センター、株式会社プレンティーズ及び
P l e n t y ' s M i l k & C h e e s e F a c t o r y
- (2) 出席委員 田中信次委員長、須田こうへい副委員長、
永田磨梨奈、おざわ良央、渡辺紀之、持田文男、森田学、栄居学、
永井真人、藤井深介、日浦和明、浦道健一、谷和雄の各委員
- (3) 随行者 山崎管理担当課長兼副課長（議会局総務課）、細井副主幹（環境農政局総務室）
- (4) 調査日 令和6年8月2日（金）
- (5) 行程 県庁 → 綾瀬市役所 → （飼料米生産現場） →
環境科学センター → 株式会社プレンティーズ及びP l e n t y ' s
M i l k & C h e e s e F a c t o r y → 県庁

2 綾瀬市役所

(1) 調査目的

綾瀬市は、飼料価格の高騰といった畜産農家が抱えていた課題、担い手の減少・高齢化、販売先がないといった水稻農家が抱えていた課題、水田の遊休地の増加という市が抱えていた課題、これらの課題を解決するため、飼料用米耕作推進による耕畜連携の取組を行っている。

そこで、同市の取組を聴取し、さらに飼料米生産現場を視察することにより、今後の耕畜連携の取組に係る委員会審査の参考に資するものとする。

(2) 当局出席者

尾埜美貴江環境農政局長、小菅知之畜産課長、長沢恒環境農政局企画調整担当課長、畜産技術センター企画指導部普及指導課長
綾瀬市産業振興部長、同農業振興課長

(3) 委員長挨拶

(4) 環境農政局長挨拶

(5) 綾瀬市産業振興部長挨拶

(6) 概要説明

以下の内容等について、説明があった。

ア 神奈川県における飼料用米・WCS_※の取組について

- (ア) 飼料用米とWCSの特徴について
- (イ) 飼料用米の利用方法について
- (ウ) 全国における飼料用米とWCSに係る情勢について
- (エ) 国における飼料用米とWCSに係る助成について
- イ WCS用稲普及事例の紹介について
- ウ 綾瀬市における飼料用米耕作に係る取組について
 - (ア) 綾瀬市農業の概要について
 - (イ) 飼料用米耕作推進のきっかけについて
 - (ウ) 綾瀬市耕畜連携推進事業補助金について
 - (エ) 飼料用米の取組について
 - (オ) 水田復元の連携取組について

※WCS（ホールクロップ・サイレージ）：通常は、「稲WCS」と呼ばれ、イネの穂と茎葉をまるごと収穫して乳酸発酵させた牛の飼料のこと

(7) 質疑応答

質 疑 県と綾瀬市の双方から説明のあった耕畜連携というのが鍵になってくるであろうと思う。例えば、畜産をやっていない市町村などがあると思うので、県内市町村の間でもばらつきがあると思うが、綾瀬市の場合は市役所が間に入って、農業と畜産業のマッチングを行っているということである。そこで県全体では、畜産をやっていない市町村におけるマッチングはどうなっているのか。現状と課題といったものがあれば教えてほしい。

応 答 飼料用米の耕作については、去年は綾瀬市、今年については厚木市、愛川町で始まっている。その中で、米を飼料用に転換することは、現在、米耕作をやっている方からはなかなか理解が得られない。マッチングをしているというよりも勧誘をしているという状況である。

その中で、個別案件のような形でやっているが、新しく畜産農家のつてがないという例があったので、それについては県の畜産課が間に入った。現段階では、相対取引をサポートするような形で対応できる状況なのでこのような形だが、耕畜連携の規模が大きくなったら餌会社などに話をしていかなければと思っている。

質 疑 WCS稲は、10アール当たり1.7トン取れるということだが、牛1頭当たりどのくらいWCS稲が必要になるのか。

次に、遊休地にしないために対策を行っているとのことだが、今まで農業に従事していなかった人が作物をやりたいといった場合、どう

いう対応を現状行っているのか。

応 答 まず、どのくらいの量が必要かということだが、伊勢原市、平塚市といった地域では酪農家が主に自分の飼っている牛に与えるために作っているところだが、1頭当たりどのくらいかという数字は持っていない。しっかりとこの取組をされているある酪農家においては、自分で作った飼料の割合は6～7割、購入飼料が3～4割で、できているところもあるが、一方で、全くそれが0という酪農家もいる。量をかなりたくさん作っても自分の農家だけで使い切れるというのが現状である。50アール作っていて、1か月、2か月食べさせることができるが、作ればまだまだ食べさせる余力はあると思う。

もう一点のこれから農業を始めていく場合の支援ということだが、WCSを作ろうが普通のお米を作ろうがそれは農業なので、県の相談窓口を通じて相談してもらえれば、支援をさせてもらう。説明にあった厚木市、愛川町でやられた方は新規参入の方で、この方は自分の土地をやっているのではなく、遊休地をやるということで申出があり、いろいろと手伝いをさせてもらった。勧誘はしているが、そういう声を拾い上げることも大事だと認識している。



(8) 飼料米生産現場の視察



(9) 調査結果

- 綾瀬市は、畜産農家と水稻農家それぞれが抱えていた次の課題を解決するため、飼料用米耕作推進による耕畜連携の取組を行い、水稻農家の減収による水田の遊休地化や耕作放棄地の増加を食い止めるという課題も解決することができたとのことであった。
 - ・ 畜産農家は、とうもろこしを主原料とする配合飼料は8割以上輸入に頼っており、世界情勢の影響から価格が上昇したため、県や市は畜産農家を対象に飼料価格高騰に対する臨時の給付金により支援をしてきたが、高騰は長期にわたる状況であったことから、畜産農家からは一時的な支援だけでなく、輸入飼料から脱却するために、国産飼料の拡大を支援する制度を求められていたという課題がある。
 - ・ 水稻農家は、担い手の減少・高齢化が問題となっており、米の販売農家はほぼおらず、家族で自家消費を行っている農家が大半を占めている。このため、労働力に限界があり販売ルートもないことから耕作者のいない水田について、水稻農家が規模を拡大して対応することが難しい状況であるという課題がある。
- 畜産農家と水稻農家の連携強化を行う耕畜連携推進事業によって、畜産農家は、市内水田で耕作された飼料用米を購入することで輸入飼料と比べ安価な飼料を確保することができ、経営安定につながる。一方で、畜産農家が受入先となり購入が確約されることにより、水稻農家は売却先が保証され、経営安定が図られて課題解決につながったとのことであった。
- 綾瀬市は、耕畜連携を畜産農家と水稻農家のマッチング、水稻農家の生産規模の拡大、飼料用米専用品種を導入しやすい環境づくりといったことにより支援をした結果、水稻農家が飼料用米耕作のため、制度を活用することにより耕作面積を拡大し、今後、市内の水田の遊休地化を減少させることが期待できるとのことであった。
- 綾瀬市内で飼料用米に取り組んだ場合の収入額試算では、飼料用米の販売価格は主食用米と比べて大きく劣るが、国や県などの補助制度を活用しながら、主食用米と遜色ない経営ができるように市の制度を構築した結果、主食用米と遜色のない、また、それ以上の収入を得ることができる制度設計となっているとのことであった。
- 神奈川県と綾瀬市は事業連携により、令和6年3月に吉岡地内の遊休地を神奈川県農地課の飼料畑貸借等推進事業と市の耕畜連携推進事業（水田復元事業）を活用し、約13アールの遊休水田を復元し、令和6年産から飼料用米の耕作に取り組んでいるとのことであった。

- これら綾瀬市役所について調査したことにより、当常任委員会での耕畜連携の取組に関する事項についての委員会審査の参考に資するものとなった。

3 環境科学センター

(1) 調査目的

環境科学センターは、県民生活に必要な良好な環境を継承していく科学技術拠点として、「環境監視等の実施」「調査研究の推進」「環境学習の推進」等の事業に取り組んでいる。

そこで、同センターの取組を聴取することにより、今後の公害の防止その他環境の保全に関する事項についての委員会審査の参考に資するものとする。

(2) 当局出席者

尾塚美貴江環境農政局長、関猛彦環境部長、田中晃環境課長、長沢恒環境農政局企画調整担当課長、加藤陽一環境科学センター所長

(3) 委員長挨拶

(4) 概要説明

以下の内容等について、説明があった。

ア 環境科学センターの概要について

イ 業務推進方針について

ウ 主な業務内容について

(ア) 環境監視について

(イ) 調査研究について

(ウ) 環境学習について

(エ) 地域気候変動適応センターについて

エ 環境科学センターの今後の取組について

(5) 施設の視察



(6) 主な質疑応答

質 疑 神奈川県というよりも、日本全体が抱えているような課題の調査・研究をされていると思ったが、建物も含めてかなり年季が入っているように見える。機器も最新の物がどんどん出ている中で、こうした最先端の研究に対して予算はどのようになっているのか。

応 答 建物については、我々ができる範囲で手入れをしているが大分傷んでおり、その辺は施設担当に相談させてもらっている。

分析機器については、新しい機械がどんどん増えてきているので当然昔と比べて精度や感度がよくなっていて性能は上がってきているが、それに合わせて値段も上がってきている。少し心配なのが、海外から来ている物が結構多いので、円安になるとそれで値段がどのくらい上がるのかということがある。

また、薬品や、機器で使うガスについてもそうで、例えば、ヘリウム自体が今、半導体の関係で取り合いになっており、値段が上がっている上、なかなか手に入らないという状況になっていて、公共機関だけでなく民間機関でもヘリウムが手に入らなくて困っているという話は聞く。

質 疑 環境科学センターとして、こういった機器があれば、もうひとつ上の調査ができるというものはあるか。

応 答 そこは、研究計画を立てながらセンターとしてもやっていきたいと思っている。我々がやりたいというものもあるし、こういうことをやってほしいというものも当然来ると思うので、その辺についても対応できるとよいと思う。

質 疑 マイクロプラスチックの海洋ゴミについては、河川に漂着していると言われており、数字も明らかにでていて、環境科学センターの研究でもそういった傾向が顕著に分かっている。こちらでやっている研究結果を「かながわプラごみゼロ宣言」などいろいろな政策を打ち出している中で、政策にしっかり生かしていかなくてはいけないと思うが、具体的に何かセンターでなされた結果がこういう形になっているというものがあったら教えてほしい。

応 答 具体的に、こうというものはないかもしれないが、プラごみの関係で今まで、ごみの関係は海岸だけだったが、プラスチックについては内陸から来るということで、上流河川の厚木や相模原も含めて、水の中に入って資源循環推進課のほうで状況の調査をしている。同じ認識を持つということが大事なので、今まで関係ないと思っていた内陸の人に対して、いかにそうではないんだと思ってもらうことが大事なの

で、そういった意味で内陸の市町村も入れてやっていくということは、我々の調査が海岸だけではなく内陸も含めて問題なのだということを示すことができ、県全体としても取り組めたと思う。

質 疑 今、マイクロプラスチックの話があったが、県独自で測定した結果を踏まえて調査しているとのことだが、調査個所は中流域、上流域、その辺のところの調査はどうなっているのか。

応 答 上流から来るということが分かったので、上流域から中流域を含めて、どういう状況になっているかということを確認するため、今は引地川の中州や川岸の資料採取をして、調査を実施している状況である。



(7) 調査結果

- 環境科学センターでは、良好な環境を継承する科学技術拠点として、次世代につながるのち輝く環境づくりを目指すことを基本方針とし、環境監視等の実施、調査研究の推進、環境学習の推進、気候変動適応の推進を四つの柱として位置づけているとのことであった。
- 同センターでは、主に次の業務に取り組んでいるとのことであった。
 - ・ 環境監視業務
大気・水環境等の実態把握として、自動測定機による大気の監視、水源環境施策における水質モニタリング、ダイオキシンや界面活性剤などの化学物質調査、航空機や新幹線の騒音測定などを行っている。
また、法・条例に基づく排水等の測定、行政検査として、水質汚濁防止法、県生活環境保全条例に基づく排水測定などの工事・事業場等立入検査、産業廃棄物処理施設や市町村ごみ処理施設等の廃棄物処理施設の検査、解体工事現場等のアスベスト調査など、発生源の監視も行っている。
 - ・ 調査研究業務
令和6年度は、マイクロプラスチックの排出実態の解明に関する研究と

いったプロジェクト研究や、天然記念物仙石原湿原を守る－水質汚濁の原因究明と環境DNA研究生態系調査手法の開発による湿原保全体制の構築－といった地域課題研究などを行っている。

- ・ 環境学習業務

令和6年度は、高校生以上の環境に興味のある方を対象とした環境活動講座、環境学習リーダー養成講座などの講座や、小学4～6年生を対象とした夏休み子ども環境体験教室などのイベントを実施又は予定している。

- ・ 気候変動適応の推進業務

神奈川県気候変動適応センターを環境活動推進課内に設置し、地域における気候変動影響及び気候変動適応に関する情報の収集、整理、分析及び提供並びに技術的助言を行う拠点の役割を担っている。

○ 同センターは今後、環境監視、調査研究、環境学習の充実という業務の3本柱を推進していき、次のとおり取り組んでいくとのことであった。

- ・ 環境モニタリング能力の維持・向上を図るとともに、マイクロプラスチック調査、環境DNAによる生物調査など、全国の自治体を先導する調査研究を推進していく。さらに、環境学習や環境情報の提供を通じて、持続可能な社会に向けた県民意識の醸成に努めていく。

- ・ 気候変動適応センター機能の充実・強化を図っていく。

- ・ 建設から30年以上経過した庁舎の適切な管理、年々高度になる分析装置等の適切な維持・更新及び分析の担い手となる職員の高度な分析スキルの確保に努めていく。

- ・ 環境問題に関する神奈川県の技術拠点として、期待に応えられる活動を展開していく。

○ これら環境科学センターについて調査したことにより、当常任委員会での公害の防止その他環境の保全に関する事項についての委員会審査の参考に資するものとなった。

4 株式会社プレントリーズ及びPlenty's Milk&Cheese Factory

(1) 調査目的

株式会社プレントリーズは、湘南ちがさきMILKを加工・製造している企業であり、湘南ちがさきMILKのかながわブランド登録を行っている団体である茅ヶ崎市畜産会酪農部とともに、農業と商業がタッグを組み地産地消の取組を行っている。

そこで、同社の取組を聴取し、さらにはかながわブランド登録製品を販売しているPlenty's Milk&Cheese Factoryを視察することにより、今後のかながわブランド振興を通じた地産地消の推進について、委員会審査の参考に資するものとする。

(2) 当局出席者

尾埜美貴江環境農政局長、納富尚義農政課長、長沢恒環境農政局企画調整担当課長
株式会社プレントリーズ代表取締役

(3) 委員長挨拶

(4) 概要説明

以下の内容等について、説明があった。

ア 株式会社プレントリーズの概要について

イ 湘南ちがさきMILKのかながわブランド登録について

(5) 主な質疑応答

質 疑 湘南ちがさきMILKという製品を使い商品化したということで、すごい成果で素晴らしいと思った反面、産業化して商品にしている会社は、プレントリーズ以外にはないということだった。ブランド化すると、鎌倉野菜のようにブランド力はあるが、価格が高くなるという傾向があるため、大量生産されている物のほうが、取り入れやすいというところもある。以前の物とこの湘南ちがさきMILKを使って作られた製品とを比べて、予算的に会社としては変わっているのか。

また、そういった産業化や製品化をしたいといった問合せは、茅ヶ崎の企業からあるのか。

応 答 茅ヶ崎産の牛乳にしても、値上げはしていない。仕入れ値は、そこまで変わらない。メーカーの物と比較しての価格だけで勝負するのはなかなか難しいところもあるが、食べてもらって判断してもらいたいというところもあるので、そこは抑えながらできる価格帯でやって、

食べたり飲んだりしてもらいたい。そこで判断してもらって、これは高い、安いということを決めてもらえればいいと思う。反面、こんなに安売りをしてしまうとブランド価値という部分もあるので、なんとなく高くなく安くなく、ちょっとご褒美的に手を取りやすい価格帯にはしている。

牛乳に関しても800ミリリットルで、530円くらいで売っているが、牧場に行くと1,000円くらいで売っているの、そういうところと比べるととても安いと言われる。高ければいいというものでもないし、その辺のあんばいが私の店のビジネスの目線で言えば、少し付加価値が付いたというところで手に取ってもらって、実際にその価格とおいしさがマッチすれば、リピートされると思う。

市内では、何社かレストランで使ってもらってはいるが、まだまだ使ってもらっているお店は少ない。情報誌に出ていることで問い合わせもいくつか来ているので、これからだなと思っている。

質 疑 ブランド力をピークに高めるのは、茅ヶ崎と辻堂のテラスモールに店舗を絞るというのも一つの作戦であるが、広げていくという作戦もあると思う。県内の販売で地域を広げるという考えは今あるのか。それとも、あくまで地元に来なければ買えないというブランド性を考えているのか。

応 答 一時的に新宿の小田急百貨店の本館にも店を出していたことがある。茅ヶ崎は圏央道の出口ができたり、東海道線が延伸したことにより、5年前くらいから1都6県のお客様がとても増えた。その結果として茅ヶ崎に多くの観光客が来ているかということ、鎌倉や箱根ほどではないかもしれないが、湘南エリアに立ち寄るというスポットとしては、茅ヶ崎はありではないかと思っている。

店舗を広げるというよりは、地元に着して、湘南エリアに遊びに来てアイスを食べ牛乳を飲んでおいしかったねと帰ってもらったほうがいいのかなどと思っている。湘南エリアは地域の力があるので、あえて都内に出たりとか店舗を広げるよりは、地域に根差していったほうがよいと思っている。

今、ふるさと納税やネット販売をしているが、それはお店に来てもらう、湘南に来てもらうための一つの手段であって、ネット販売はそういったところがあると思う。茅ヶ崎に一回食べに来て、お店やエリアの雰囲気も含めて、帰った後にもう1回食べたいなとネット販売で買ってもらうほうがよいのではないかと思っている。

質 疑 この牛乳を多くの人に飲んでもらうために、かながわブランドに登

録することを選んだのはなぜか。

応 答 かながわブランドに牛乳の登録がなかったということがある。県内では、牛乳を販売している牧場はあるが、登録はされていないので、牛乳初の登録という点がポイントで、お墨つきをもらいたかったというところもあるし、神奈川県からブランドに認定されるという意義も大きいと思った。正直なところ、消費者の方がこのブランドを見て買おうかなと思うかは分からないが、私は地方に行ったときにこれはいいと太鼓判があれば、手に取ってしまうたちなので、そういった意味ではかながわブランドに認定してもらうことによって、普通に販売するより、神奈川県から認定されている商品ですと言えば、後ろ盾があるので、大きいかなということで登録させてもらった。

質 疑 牛乳初の登録ということで、メディアへの露出も増えたと思うが、実際に登録したことによりどのくらいの反応があったのか。

応 答 今日配付されている情報誌は出たてで、まだ市内全部に行き渡っていないが、ブランド認定されてからラジオやテレビといったところから、問合せが来たりということはある。メディアの方は、そういったものから検索してくるので、そういった意味ではただ牛乳を売りましたというより、かながわブランドに認定されたということがあるだけで、ヒット数が変わってくるので大きいと思っている。

質 疑 茅ヶ崎市役所も話に出てきたと思うが、湘南ちがさきMILKのネーミングの際に、湘南の部分は付けなくてもよいのではないかという話はなかったのか。

応 答 そういう話はなかった。市役所は特に絡んでなかったということもあるが、分かりやすくという部分では、ちがさきのみよりは、湘南が入った方が全体的なイメージはよいと思った。

質 疑 6次産業化をしようという農家が結構いると思うが、日々の業務に追われてなかなか日々の業務以外のところに従事できないと悩んでいる方がたくさんいると思う。お話の中で、ノウハウが分からなかったということがあったが、今後、こういう形の農業と商業のタッグは見本となってくる気がする。そのノウハウについて情報の一つとして、伝えることは考えているか。

応 答 お困りごとがあり知っていることがあればお伝えしていきたいと思っている。自分で6次産業化をやりたいという方もいるが、酪農家は育てることが仕事なのでそこまで手が回らない。しかし、こうやってつながりができて我々がお手伝いする中では、マッチングということがとても大事だと改めて関わることで感じた。酪農家以外でも、他

の農家とつながりがあるが、それぞれの農家の考えもあるが、生産したものを商品にしたいという方は多いので、そこをお手伝いできればいいなと考えている。

(6) Plenty's Milk&Cheese Factoryの視察

(7) 調査結果

- 湘南ちがさきMILKは、茅ヶ崎市畜産会酪農部に所属する生産者が生産する生乳を100%使用した牛乳で、誕生のきっかけとしては、茅ヶ崎の生乳を使ったローカルなアイスクリームを作りたいと市に相談していた株式会社プレントーズに、生乳を自分たちで加工・販売する6次産業化を考えているが、ハードルが高くて簡単にはできないと悩んでいた地元茅ヶ崎の酪農家を市の担当者が紹介してくれたことにより、2021年にアイスクリーム、2023年に牛乳の商品化が実現したとのことであった。
- 酪農家はどのようにやっていけばよいかというノウハウもなかったので、平塚にある地元で取れた新鮮な農産物を使ったジェラートを販売する地産地消の店への視察を県の技術センターの方々に調整してもらい、酪農家側には酪農家の目線で見えて意外とできるのではないかという気持ちになってもらい、企業側はどのようにすれば許可がもらえるのかという2方向から実現に向けて進めていったとのことであった。
- 牛乳を作るに当たって、一番大変だったことは保健所の許可であり、乳処理業の許可を取ることにハードルがなかなか高く、いろいろな検査、施設の条件、どういった輸送をするのか、温度帯はどうかかなど、いろいろとクリアしていかなければならないことが一番大変だったとのことであった。
- 地産地消の製品を作る工夫として、アイスクリームをメインにして、ワッフル、焼き菓子など自分のところ全ての製品について牛乳が主原料ということがあったので、その辺の商品に関しては、既存の大手メーカーの牛乳から湘南ちがさきMILKへ切り替えた。また、ホモジナイズ処理※をしない牛乳のため、しぼりたてに近い反面、加工するのは難しい商品もあるが、市販の牛乳とは味に甘味があるなど大きく違うとのことであった。特に夏場は牛がたくさん水を飲むのですっきりとした後味になるし、冬になるともっと濃い味になるなど、季節によって味の違いが味わえることから、そういった点がメーカーの牛乳とは大きく違う特色となり、それが差別化にもなるので、しぼりたての地元の牛乳を使うということは、そのお店やその街のメリットになるのではないかとのことであった。

※生乳に含まれる脂肪球を小さく均一化する処理のこと

- 今年の5月にかながわブランドに登録し、そのことがメディアに取り上げられるきっかけとなり、いろいろなところから取材を受けた。地域の方々に地元の牛乳が飲めると思ってもらえるようになったことがブランド登録の一番大きな成果であるとのことであった。
- 湘南ちがさきM I L Kは、現在、株式会社プレンティーズしか製造していないが、自分の店だけで売るつもりはなく、今後はいろいろなお店でこの牛乳を原料としてお菓子、シチューなど、湘南ちがさきM I L Kを使った何かを打ち出してもらえれば幅広く商品になり、活用しやすく、地域も盛り上がるのではないかとのことであった。
- これら株式会社プレンティーズについて調査し、さらにはかながわブランド登録製品を販売しているP l e n t y ' s M i l k & C h e e s e F a c t o r y を視察することにより、当常任委員会でのかながわブランド振興を通じた地産地消の推進について、委員会審査の参考に資するものとなった。